

神奈川県三浦市方言における老年層話者のアクセントについて

坂本 薫（國學院大學大学院生）

lukun84@icloud.com

1. はじめに

本発表では、対面調査によって得られた神奈川県三浦市方言の老年層話者のアクセントについて述べる。神奈川県の方言は、俚言の蒐集と方言区画の設定に関しては豊富な先行研究があるが、音声、音韻の面ではまだその実態を明らかにする余地が残されている。坂本（2017）では、三浦市方言の老年層話者の発音の観察から、伝統的な音声・音韻的特徴について言及した。その結果を受けて、アクセントにおいても、当該方言の古相の保持が期待されたため、同一の話者を対象に調査を続行している。本発表は調査の結果から、アクセントの体系と名詞と動詞、形容詞の活用形のアクセントについて述べる。

2. 三浦市の位置

2. 1 地理的概況と産業、交通

神奈川県東南部の三浦半島の最南端に位置する、人口約4万5千人の市である。北部を横須賀市と接している。北部は農村地帯で畑作が主で、南部沿岸は江戸時代より漁港として発達。江戸時代は天領。1955（昭和30）年、二町一村が合併、三浦市として市制施行。今回の調査地点である三浦市三崎は、三浦半島の南西部、相模湾沿岸に位置する。

鉄道が三浦市内まで延伸したのは1966（昭和41）年。1975（昭和50）年、市内北西部に三崎口駅が開業するが、市の中央部には到達しておらず、以南の交通はバス路線が主となる。京浜急行線で品川駅～三崎口駅間の所要時間はおよそ65分である。

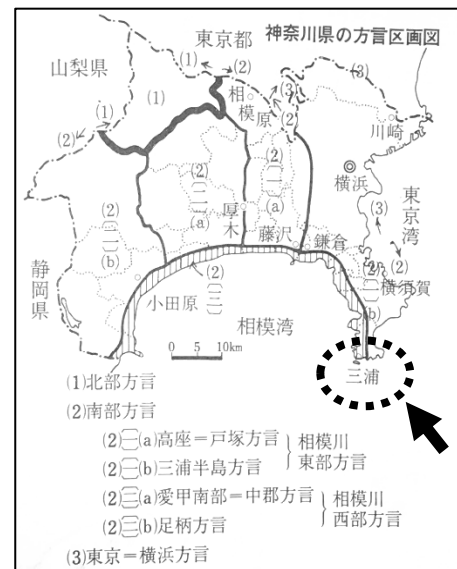


図1「神奈川県方言」『現代日本語方言大辞典』より。矢印及び点線は筆者による。

2. 2 方言区画上の位置

全国方言の区画における位置づけとして、東條操（1954）によると、神奈川県方言は東部方言に含まれる関東方言の、さらに西関東方言に含まれると述べられている。

神奈川県内の方言区画は、日野資純（1952、1964）等で述べられている（図1）。三浦市方言は、図中（2）の南部方言に含まれる相模川東部方言の下位区分である三浦半島方言に属する。ただし、西部沿岸部は相模湾沿岸方言の区画にも含まれる。

坂本（2017）では、三浦市で生育した話者を対象にした調査から、三浦半島方言の音声的特徴である[ʒe]と、相模湾沿岸方言の音声的特徴である[je]、明治期東京のアクセントと共通する「～ヤガレ」形式のアクセントが保持されていることについて言及した。

3. 調査について

調査は2017年3月～7月、三浦市内で行った。話者は三浦市南部、旧三浦郡二町谷で生まれ育った81歳男性（調査当時）。現役時代は市内で会社員として勤務。外住歴は無い。両親ともに現三浦市域で生まれ育っている。

調査は対面式で、調査項目は名詞、動詞、形容詞とその活用形。名詞語単独と「が」「を」「に」等を付けた、もしくは助詞が脱落した文の発音を観察した。動詞と形容詞については、語単独の発音と、活用形を含む文を作成してもらい、発音してもらった。調査対象は平山輝男（1960）所収の「全国アクセント比較表」に掲載されている語が中心で、これに多拍語を加えた。

4. 調査結果と考察

4. 1 方言的特徴の概観¹

調査により観察された方言的特徴を挙げる。語中語末のガ行音は規則的に鼻濁音[ŋ]が観察された。また、無声子音に挟まれた狭い母音の無声化は頻繁に生じるが、それに伴うアクセントの上がり目の移動は規則的ではなく、たとえば「吹く」[φɸɪˈkw]のように無声化した拍の後に上がり目が来る発音もしばしば観察された。連母音は「ムネータ（胸板）」や「カンゲール（考える）」、「カー（買う）」、「アエー（青い）」など、ai、ae、au、oiには融合が観察されたが、「アツイ（熱い）」「ウスイ（薄い）」などuiの融合は観察されず「カイー（痒い）」などごく少数の語にしか見られなかった。このほか、ヒ→シの交替「シッパル（引っ張る）」や、動詞語末のラ行の撥音化「トンソーダ（取るそうだ）」に加え、「コイ（これ）」「ソイ（それ）」や「デライタ（出られた）」など、一部の語にレ→イの交替が観察される。

4. 2 アクセントの体系

東京語のアクセント同様、アクセントの「上がり目」の有無、そしてその位置が弁別の特徴であり、その対立はn拍の語に対してn+1種ある。表1に3拍語までのアクセントの体系を示した。

表1：三浦市方言のアクセントの体系

拍	音韻論的解釈	語例
1	/O/	柄、蚊、毛、子、血…
	/Oɪ/	絵、尾、木、酢、田、手、荷…
2	/OO/	飴、蟻、烏賊、梅、釘、行く、着る…
	/OOɪ/	石、歌、北、寺、足、鍵…
	/OɪO/	斧、秋、汗、婿、夜、会う、見る、良い…
3	/OOO/	欠伸、錨、鎖、衣、魚、机、遊ぶ、借りる…
	/OOOɪ/	小豆、力、頭、扇、鏡、刀、瓦…
	/OOɪO/	五つ、さざえ、油、余る、起きる、赤い、黒い…
	/OɪOO/	朝日、嵐、もみじ、帰る、通る…

4. 3 名詞のアクセント

1～3拍の語のアクセントを、類別語例を中心に表2に示した。表中の1, 2拍の名詞に注目

¹ 音声の表記は片仮名と一部IPAを用いた。アクセントの上がり目は記号「ɪ」で示した。以降のページも同様。

すると、たとえば1拍Ⅰ類の「帆」や、2拍Ⅲ類の「神」、「雲」で（この2語は頭高型のアクセントも観察されたが）、それぞれ伝統的なアクセントが保持されているため、語の類で見たときに例外が少ないように見える。なお、尾高型の名詞に助詞「の」が接続する際、東京のアクセントは「ハナノイロガ…（花の色が…）」のように平板に発音されると言われるが、今回の調査では言われている通り平板に発音される場合もあったが、「ウラノハタケデ…（裏の畑で…）」のように下がり目が観察される場合もあった。これは3拍以上の名詞についても同様である。

3拍の名詞については、尾高型のアクセントと中高型のアクセントに特徴が見える。尾高型のアクセントについて、例えばⅡ類「小豆」、「毛抜き」、Ⅳ類「いたち」、「林」、「筵」などは東京のアクセントの古相と共通する。「とかげ」、「くらげ」に関しては方言独特のアクセントの可能性もある。中高型のアクセントが多く観察される点については日野資純（1984）などでも指摘されている通り、神奈川県方言の一つの特徴であると言える。Ⅲ類の「小麦」や「栄螺」、Ⅴ類の「油」や「心」など、東京のアクセントの古相と共通するものもあれば、「茸」「マミヤ（眉）」など、地域的特色のあるアクセントと考えられる語もある。ちなみに、神奈川県方言の特色として、中高型の「南瓜」のアクセントが知られているが、話者は方言としては俚言の「トーナス」を使用しており、語形「カボチャ」は後から学習した語であったためか共通語と同じ平板型のアクセントであった。

表2：三浦市方言老年層話者 1～3拍名詞のアクセント

〈 〉内の数字は類。表中*は頭高型も。**は尾高型も。***は平板型も。

拍	型	語例
1	平板型	柄、蚊、毛、子、血、帆…〈Ⅰ〉 名、葉、日、藻〈Ⅱ〉
	起伏型	世〈Ⅰ〉 矢〈Ⅱ〉 絵、尾、木、酢…〈Ⅲ〉
2	平板型	飴、蟻、烏賊、牛…〈Ⅰ〉
	尾高型	石、岩、歌、音、北…〈Ⅱ〉 足、網、泡、家、神*、雲*、坂*…〈Ⅲ〉
	頭高型	斧〈Ⅲ〉 跡、粟、息、糸…〈Ⅳ〉 秋、汗、雨、鮎…〈Ⅴ〉
3	平板型	欠伸、筏、錨、田舎、鯛…〈Ⅰ〉 間、桜、扉、百足〈Ⅱ〉 黄金、二十歳〈Ⅲ〉 畑、東**〈Ⅳ〉 兎、鰻、狐、雀、背中…〈Ⅵ〉 後ろ、鯨、葉、盥〈Ⅶ〉
	尾高型	麓***〈Ⅰ〉 小豆、毛抜き、とかげ、釣瓶、二つ、二人、タベ、力〈Ⅱ〉 頭、 いたち、瓦、拳、鏡、刀、林、筵…〈Ⅳ〉 くらげ、豆腐、ムジナ（狸）
	中高型	小麦、栄螺〈Ⅲ〉 五つ、思い、境〈Ⅳ〉 油、命*、心、姿*、涙*、柱、枕*、 まなこ*〈Ⅴ〉 茸、コケラ（鱗）、ひじき、マミヤ（眉）、若芽、山葵
	頭高型	えくぼ、緑〈Ⅱ〉 岬〈Ⅲ〉 嵐、紅葉、わらび〈Ⅳ〉 朝日、鯉***、きゅうり、 ざくろ〈Ⅴ〉 烏、高さ〈Ⅵ〉 蚕、兜、便り、病〈Ⅶ〉

次に、4拍以上の語について、目立った特徴を以下に挙げる。「足音」や「雷」など、尾高型から中二高型への変化が指摘されている、いわゆる「A型B型のアクセント」については、調査した語のほとんどで尾高型のアクセントが観察された。このほか、複合名詞について、「サケカス（酒粕）」や「ガラスマド（ガラス窓）」など、後部要素の下がり目が生かされるアクセントや、

「アカトンボ (赤とんぼ)」や「ウミボーズ (海坊主)」など、前部要素の上がり目が活かされる頭高型のアクセントなど、東京および周辺域における多拍の名詞の伝統的な姿が観察された。

4. 4 動詞のアクセント

動詞は、平板型と起伏型のアクセントの対立が明確にある。2 拍の語では「イク (行く)」と「カク (書く)」の 2 種、3 拍の語では「アガル (上がる)」、「アマル (余る)」、「トース (通す)」の 3 種の方の対立がある。本稿ではまず、3 拍の動詞の活用形のアクセントについて主に述べる。表 3 には「遊ぶ」、「入る」、「選ぶ」、「帰る」の活用形のアクセントが示してある。Ⅲ類の動詞「入る」は、東京のアクセントは頭高型で、活用形のアクセントも頭高型の動詞と同じになるが、当該方言においては一部、起伏型との揺れも見られるものの、Ⅰ類 (平板型) の動詞とほぼ同じアクセントになる。次に、各型式のアクセントに着目すると、特にⅠ類 (平板型) に特徴が見られる。連用形に「行く」が接続した形式のアクセントで、「アスピイク」のように動詞の末尾に上がり目があるのは県内の他の地点でも観察されている事象である。また、「ダロー」、「ナカッタ」が接続したアクセントは西関東方言におけるアクセントの古相を残している。また、後続形式に上がり目のある「ダンベ」や「ダトヨ」が接続したアクセントも注目すべき点である。

表 3 : 三浦市方言老年層話者 動詞の活用形のアクセント

後続形式 語例	終止形 命令形	～タ (た) ～テ (て)	～ナ (な・禁 止) ～バ (ば・仮 定)	～コト (こと・事) ～イル (れる・受身、尊敬) ～セル (せる・使役) ～テー (たい・願望) ～ネー (ない・打消)	～イク (しに行く)	～ノガ (方が、物が) ～ヤー (ば・仮定) ～ペー (よう・意思・勸 誘) ～マス (ます)
遊ぶ (3拍・Ⅰ類)	アスブ アスベ	アスンダ アスンデ	アスブナ アスベバ	アスブコト アスバイル アスバセル アスピテー アスパネー	アスピイク	アスブノガ (アスブノガとも) アスピヤー アスブペー アスピマス
※入る (3拍・Ⅲ類)	ヘール ヘーレ	ヘーッタ ヘーッテ	ヘーンナ ヘーレバ	ヘーンコト ヘーライル ヘーラセル ヘーリテー (ヘーリテーとも) ヘーラネー (ヘーラネー、	ヘーリイク	ヘーンノガ (ヘールノガとも) ヘーリヤ ヘーンペー ヘーリマス
選ぶ (3拍・Ⅱ類)	エラブ エラバ	エランダ エランデ	エラブナ エラババ	エラブコト エラバイル (エラバイルとも) エラバセル エラピテー エラバネー	エラビイク	エラブノガ エラビヤー エラブペー エラビマス
帰る (3拍・Ⅱ類)	ケール ケーレ	ケーッタ ケーッテ	ケーンナ ケーレバ	ケーンコト ケーライル (ケーライルとも) ケーラセル ケーリテー ケーンネー	(ケーリイク)	ケーンノガ ケーリヤ ケーンペー ケーリマス

後続形式 語例	～ソーダ (そうだ・様態) ～ナガラ (ながら)	～ダロー (だろう・推量) ～トヨー (そうだ・伝聞) ～ラシー (らしい)	～ダンベ (だろう) ～ダトヨ (そうだ・伝聞) ～ホーガ (方が) ～ヤガレ (やがれ)	～ナカッタ (なかった) ～ッサンナ (するな・禁止)
遊ぶ (3拍・I類)	アスピソーダ アスピナガラ	アスピダロー アスピトヨー アスピラシー アスピッセー アスピベヨー	アスピダンベ アスピダトヨ アスピホーガ アスピヤガレ (アスピヤガレとも)	アスピナカッタ (アスピナカッタとも) アスピッサンナ
※入る (3拍・III類)	ヘーリソーダ ヘーリナガラ	ヘーリダロー ヘーリトヨー ヘーリラシー ヘーリッセー ヘーリベヨー	ヘーリダンベ ヘーリダトヨ ヘーリホーガ ヘーリヤガレ (ヘーリヤガレとも)	ヘーリナカッタ (ヘーリナカッタとも) ヘーリッサンナ
選ぶ (3拍・II類)	エラビソーダ エラビナガラ	エラビダロー エラビトヨー エラビラシー エラビッセー エラビベヨー	エラビダンベ エラビダトヨ エラビホーガ エラビヤガレ (エラビヤガレとも)	エラビナカッタ (エラビナカッタとも) エラビッサンナ
帰る (3拍・II類)	ケーリソーダ ケーリナガラ	ケーリダロー ケーリトヨー ケーリラシー ケーリッセー ケーリベヨー	ケーリダンベ ケーリダトヨ ケーリホーガ ケーリヤガレ	ケーリナカッタ ケーリッサンナ

動詞のもう一つの問題点として、複合動詞のアクセントがある。坂本 (2017) では、「オキヤガレ (起きやがれ)」のような、前部要素の下がり目が生かされる例を示したが、複合動詞でも同様に、前部要素の下がり目が保たれるアクセントが観察されることが予想された。そこで、前部要素が起伏型の動詞である複合動詞を中心にアクセントを観察したところ、多くは「アミダシタ・アミダシタ (編み出した)」のように平板型か、末尾の2拍前に下がり目のあるアクセントとの間で揺れていたが、「ケッタボス (蹴倒す)」や「オモイシル (思い知る)」、「マチカメール (待ち構える)」など、より古いと考えられるアクセントも観察された。

4. 5 形容詞のアクセント

伝統相を多く残す名詞、動詞とくらべると、形容詞のアクセントの実態には変化の兆候が観察された。終止形単独のアクセントは、「アセー (浅い)」、「タケー (高い)」のように対立が保たれている語もあるが、同音異義語の「熱い・暑い」と「厚い」の区別が判然としないとか、「アケー・アケー (赤い)」と両方の方で発音される語があるなど、平板型から起伏型への統合が生じているような傾向が見える。中郡二宮町県内で、語尾の連母音が融合すると平板型の形容詞が起伏型で発音されやすくなる地域があるが、当該方言では、「オセー (遅い)」と融合しても平板型が保たれていたり、「カルイ (軽い)」と非融合形でも下がり目が観察されたりと、語尾の連母音の融合は起伏型への統合と関与していない様子であった。活用形のアクセントでは平板型と起伏型の対立は保たれているが、それぞれの形式で揺れを生じている部分がある。たとえば、起伏型の頭高型の形式は、下がり目が1拍後退した中高型との間で揺れている。また、「～カッタ」と「～ケレバ」の形式のアクセントの揺れは同一のアクセントの型への変化の方向と言える。

表4：三浦市方言老年層話者 形容詞の活用形のアクセント

後続形式 語例	終止形	～ヨ (よ) ～カ (か・疑問) ～ダ (だ・断定) ～テ (て) ～タ (た) ～バ (ば・仮定) ～キャ (ば・仮定)	～コト (事) ～デス (です) ～カラ (から) ～ジェン (ではないか) ～ノガ (方が、物が) ～ッテ (て) ～ネー (ない・打消) ～カネー (～はない) ～ナル (なる)	～ベー (べー・推量)	～ソーダ (そうだ・様態) ～トヨー (そうだ・伝聞)	ラシー (らしい)
浅い (3拍・I類)	アセー	アセーヨ アセーカ アセーダ アサクテ アサカッタ (アサカッタと揺れ) アサケレバ (アサケレバと揺れ) アサキャ	アセーコト アサイデス アセーカラ アセーゲン アセーノガ アサクッテ アサクネー アサカネー アサクナル	アサカンベー	アサソーダ アセートヨー	アセーラシー
高い (3拍・II類)	タケー	タケーヨ タケーカ タケーダ タカクテ※ タカカッタ※ タカケレバ※ タカキャ※	タケーコト タカイデス タケーカラ タケーゲン タケーノガ タカクッテ※ タカクネー※ タカカネー※ タカナル※	タカカンベー	タカソーダ タケートヨー	タケーラシー

なお、表中の※は「タカ〜」との揺れを表す。

5. 結論と今後の課題

三浦市方言のアクセントは東京式アクセントの体系を持つ。名詞と動詞のアクセントからは、当該地域やその周辺の地域のアクセントの伝統相が観察される一方で、形容詞は起伏型への統合や、新しいアクセントの型との間での揺れが見られるなど、変化が目立つ結果となった。

課題は、話者1名に対して調査を行っている点である。観察されたアクセントがどのような性質であるかは、先行研究と共通していればわかるが、合致しないデータについては複数の話者のデータをみて確認する必要がある。調査を継続し、データを充実させたい。

参考文献

- 秋永一枝 (2001) 「東京アクセント習得法則」 金田一春彦・監 『新明解日本語アクセント辞典』 三省堂
- 坂本薫 (2017) 「神奈川県三浦市方言にみられる音声、音韻の特徴」 第335回日本音声学会研究例会発表資料
- 東條操 (1954) 『日本方言学』 吉川弘文館
- 日野資純 (1952) 「相模方言の素描 (その方言区画)」 『国語学』 9集 武蔵野書院
- 日野資純 (1964) 「神奈川県の方言区画」 『日本の方言区画』 日本方言研究会編 東京堂
- 日野資純 (1984) 「アクセント研究に対する一つの提言 (アクセント類別語彙未登載語のアクセントと方言研究)」 『音声学会会報』
- 日野資純 (1992) 「神奈川県方言」 平山輝男ほか編 『現代日本語方言大辞典』 1巻 明治書院
- 平山輝男・編 (1960) 『全国アクセント辞典』 東京堂